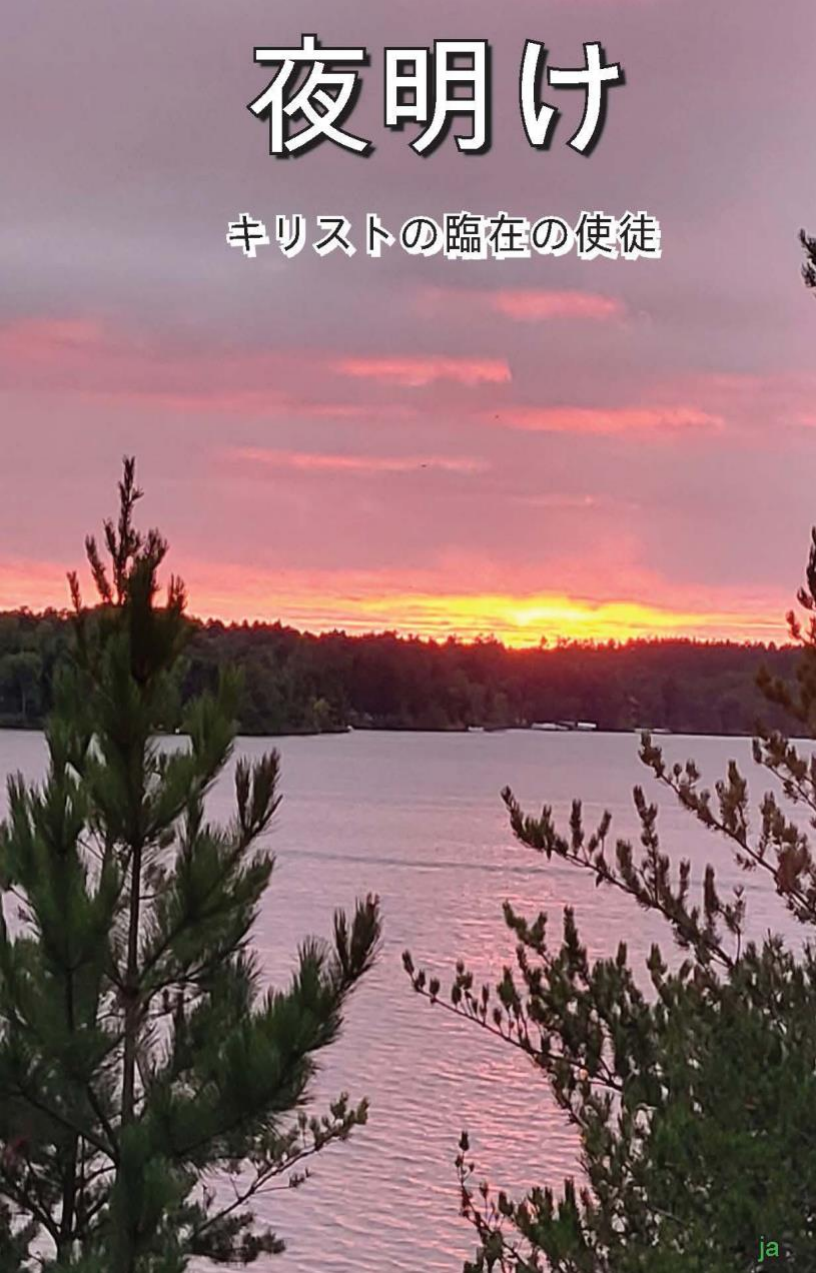


# 夜明け

キリストの臨在の使徒



# 『ドーンマガジン』

2026年6月

## 目次

夜明けの見どころ.....	2
ペンテコステの日 .....	2
インターナショナル・バイブル・スタディーズ .....	19
デボラとバラク .....	19
ハンナの祈りが聞き入れられる.....	22
ヨナタンとダビデ——忠実な友 .....	25
勇敢な預言者アモス.....	28
キリスト者の生活と教理.....	31
確証された約束.....	31

*聖書を開いて一緒に読みましょう！*

## ペンテコステの日

「五旬節の日、信者たちは皆、一つの場所に集まっていた。すると突然、天から激しい暴風のような音がして、彼らが座っていた家全体を満たした。そして、炎のような、あるいは火の舌のようなものが現れ、一人一人の上に留まった。すると、そこにいた人々はみな聖霊に満たされ、聖霊が彼らに与えた力によって、異国の言葉で話し始めた。」

使徒行伝 2:1-4

キリスト教世界では、一般的に三つの傑出した出来事が信仰の基盤として認識されている。すなわち、母マリアによるイエスの奇跡的な誕生、カルバリの十字架におけるイエスの死、そして「三日目」に神の霊的な性質へと復活したイエスである。キリスト教徒にとって極めて重要な第四の出来事がある。しかし、それは本来あるべきほど深く評価されていない。それは、イエスの復活から50日後に起こった「ペンテコステの日」である。本稿では、キリスト教信仰の歴史におけるこの特別な日の起源、背景、そして何よりもその意味について考察することを目的とする。

「ペンテコステ」という言葉は聖書の中でわずか3回しか見られず、ギリシャ語であるため、新約聖書にのみ登場します。最もよく知られている用例は、冒頭の聖句に見られます。この言葉は、後に使徒行伝20章16節でも用いられています。「パウ

口は、アジアで時間を費やすことを避けたかったため、エフェソをして航海することを決めていた。なぜなら、もし可能であれば、ペンテコステの日にエルサレムに到着したいと急いでいたからである。」この言葉の最後の用例は、コリント人への第一の手紙**16章8節**にあります。「私はペンテコステの祭りの間、ここエフェソに留まるつもりです。」これら後者の二つの箇所からは、ペンテコステが、使徒行伝第**2章**に記されている聖霊の降臨に関する注目すべき出来事以上のものだったことが示唆されています。ペンテコステは、旧約聖書に記述されているユダヤ人の祭日の一つとしてその起源を持っています。

## 旧約聖書の祭り

新約聖書の時代に「ペンテコステ」として知られるようになったものは、イスラエルの三つの年次祭りの一つであった。旧約聖書では、それは「収穫の祭り」と「七週の祭り」という二つの名称で呼ばれていた。出エジプト記**23章14～16節**では、「収穫の祭り」という名称で次のように記されている。「あなたは一年に三度、わたしのために祭りを祝わなければならない。あなたは種なしパンの祭りを祝わなければならない……。また、収穫の祭り〔ペンテコステ〕、すなわち、あなたが畑に蒔いた労働の初穂を祝わなければならない。そして、年の終わりに、あなたが畑から労働の成果を収穫した時の、収穫の終わりの祭りを祝わなければならない。」

この祭りに関して言及されているのは、申命記**16章9節、10節、16節**でもあり、そこでは「七週の祭り

」と呼ばれています。「収穫の時期に穀物の刈り取りを始めた日から七週間を数えなさい。そして、あなたの神、主を称えるために収穫の祭りを祝いなさい。主から受けた恵みに応じて、自発的な献げ物を主のもとに持って来なさい。……イスラエルのすべての人は、毎年、この三つの祭り、すなわち、種入れぬパンの祭り、収穫の祭り、仮庵の祭りを祝わなければならない。これらの各の機会に、すべての人は、主なるあなたの神が選ばれる場所に現れなければならない。しかし、主への献げ物なしに、主の前に現れてはならない。」七週の祭りは、出エジプト記34章22節と民数記28章26-31節の2か所でも言及されている。

レビ記第23章では、五旬節がいつ行われたのか、その目的、そしてなぜ「収穫の祭り」と「七週の祭り」という二つの名称で呼ばれたのかについて、詳細に説明されています。5～7節には次のように記されています。「第一の月の十四日の夕べは、主の過越の祭りである。また、その月の十五日は、種入れぬパンの祭りである。……初日〔種入れぬパンの祭りの初日——第一の月の十五日〕には、聖なる集会を開かななければならない。その日には、いかなる労役もしてはならない。」この「種入れぬパンの祭りの初日」は、「聖なる集会」、すなわち特別な安息日となるべきものでした。安息日とは、イスラエル人が労役を行わない日でした。この場合、それは毎週の第七日の安息日ではなく、特別な安息日、すなわち主への聖なる集会でした。

レビ記**23章10節、11節**を続けて読むと、「イスラエルの子らに告げて、彼らに言え。あなたがたが、わたしがあなたがたに与える地に入り、その収穫を刈り入れるとき、あなたがたは収穫の初穂の束を祭司のもとに持って来なければならない。祭司はそれを主の御前で揺り動かして、あなたがたのために受け入れられるようにする。安息日の翌日に、祭司はそれを揺り動かす。」イスラエルの穀物収穫の初穂であるこの束、あるいは一握りの穀物を「揺り動かす」ことは、前述の通り、**15日**である特別な安息日の「翌日」、すなわち**第1月の16日**に行われることになっていた。

レビ記**23章15、16節**には次のように記されている。「安息日の翌日、すなわち、あなたがたが特別な供え物として捧げる穀物の束を携えて来る日（第一の月の**16日**）から、七つの完全な週（**49日**）を数えなさい。七番目の安息日の翌日、すなわち**50日後**まで数え続けなさい。そして、主への新しい穀物の供え物をささげなさい。」この**50日目**は「七週の祭り」、すなわち「収穫の祭り」であった。この祭りが「七週の祭り」と呼ばれるのは、祭りの日が、初穂の束がささげられた時から**7週間と1日**を数えて決定されたためである。さらに、ギリシャ語の「ペンテコステ」は「**50日目**」を意味します。ユダヤ暦の各年の計算方法によって、ペンテコステの日付は**5月下旬から6月上旬の間**で変動することがあります。レビ記**23章**の計算に基づく、今年のペンテコステに相当する日付は**2026年5月23日**でした。

## イスラエルの祭りの目的

このイスラエルの祭りは、収穫の初穂に対して神に感謝を捧げる祝祭であり、そのため「収穫の祭り」という別名も持っています。これは特別な収穫でした。野菜や果物の収穫ではなく、穀物、具体的には小麦の収穫でした。この収穫の初穂は神に捧げられました。この祭り期間中、多くの供え物が捧げられました。全焼のいけにえ、穀物のいけにえ、酒のいけにえ、罪のいけにえ、そして平安のいけにえなどがあり、これらはすべて、小麦の収穫に対する神への感謝の祝いのために捧げられたものでした。レビ記23章16～20節

この祭りの特別な供え物として、「新しい穀物の供え物」が定められていた(16節参照)。この供え物については、レビ記23章17節に次のように記されている。「あなたがたは、それぞれの住む地( )から、上等の小麦粉で作った、酵母を入れたパン二個を携えて来なければならない。これらは主への初穂である。」イスラエル人は、小麦の収穫の初穂から作ったパン二個をささげるべきであった。これらのパンは、収穫の恵みに対する感謝と、主への献身として、主の御前で揺り動かされることになっていた。五十日前に、彼らは神の前で捧げ物を揺り動かしたが、それは初穂のほんの一握りに過ぎなかった。今や彼らは小麦の収穫を本格的に始め、収穫したばかりの穀物で作った二つのパンを主への捧げ物として持ち寄った。彼らの収穫は、すべての小麦が集められるまで続くこととなった。

## 新約聖書との関連

イスラエルの収穫の祭り、すなわち七週の祭りに詳しく触れる理由は、それが新約聖書のペンテコステと具体的に結びついているからである。まず、この祭りの時期の対応関係に注目しよう。先に引用したレビ記**23章5節**にあるように、第一の月の**14日**はイスラエルの過越の祭りであった。新約聖書において、これは「世の罪を取り除く神の小羊」である、より偉大な過越の小羊としてのイエスの死に対応する。（ヨハネ**1:29**）。イエスの死は、まさにこの同じ日に起こりました。再びレビ記**23章10節、11節**を参照すると、その**2日後**の第一の月の**16日**、初穂の束、すなわち一握りの穀物が主の前で揺り動かされました。これは、過越の小羊としての死から**2日後**に起こったイエスの復活に対応しています。イエスが予告された通り、イエスはユダヤ暦による第一の月の**14日**の一部、**15日**全日、そして**16日**の一部、計三日の間、墓におられました。マタイ**16:21**；ルカ**9:22**

使徒パウロは、コリントの信徒への手紙第一**15章20節**で、イエスは「眠りについた者たちの初穂」であると述べました。イエスは初穂の束、すなわち一握りの初穂であり、神の力強い御力によって死からよみがえり、永遠の命を得た最初の人でした。（コロサイ人への手紙**1:18**）。この初穂の束を「揺り動かす」という象徴的な行為は、イエスの贖いの犠牲が神に受け入れられたことを示しており、その結果として、神の力によってイエスは死からよみがえられました。最後に、初穂であるイエスの復活から七つの安息日と一日、すなわち

五十日を数えると、使徒行伝第2章に記されているように、五旬節の日に至ります。

イスラエルの祭りが小麦の収穫の初穂を神に捧げるものだったのと同様に、ペンテコステの日は、より偉大な初穂、すなわち「霊的な小麦」を神に捧げることを包含していました。忠実なクリスチャンから成る教会は、初穂の群れの一部として含まれることになっていたのです。イエスは初穂のクラスの「最初」の方でしたが、ヤコブの手紙1章18節に述べられているように、教会もまた「ある種の初穂」なのです。黙示録の著者ヨハネも、黙示録14章4節において、忠実なクリスチャンたちを「初穂」として言及しており、彼らを「人間の中から贖われ、神と子羊への初穂となった者たち」と描写している。この教会の奉獻はペンテコステに始まり、そこでは教会が天の父の前に、神に捧げられたものとして象徴的に掲げられ、示されたのである。

ペンテコステの日は、神の計画における三つの極めて重要かつ決定的な出来事の集大成でした。第一は、イエスが十字架上でアダムの身代金として死なれた際に支払われた贖いの代価です。（テモテへの手紙第一 2:5,6）。これら傑出した出来事の第二は、神の力強い御力によるイエスの復活でした。（エフェソの信徒への手紙 1:19-21）。第三はペンテコステの日、すなわち、将来の教会が天の父に献げられた日でした。

## ペンテコステの日

ペンテコステの日を取り巻く出来事は数多い。それは単に聖霊が教会に臨んだ日というだけではない。確かにそのような出来事はあったが、その恵みは当時そこにいた人々だけでなく、それ以来の全期間を通じて、自分の人生を神に受け入れられる形で献身した人々にも及んでいる。

イエスに生涯を捧げていた、上階の部屋に集まった**120**人の弟子たちにとって、ペンテコステの日は多くのことを意味していました（使徒行伝**1:15**）。それは、神が彼らによる神への献身を受け入れられたことを意味しました。それは、彼らが今や神の御前で義と認められたことを意味しました。それは、今こそ彼らの犠牲の生活が始まることを意味し、また、聖霊による新生が成し遂げられたことを意味しました。その結果、彼らは今やキリスト・イエスにある新しい被造物となるのです。ローマ**5:1**；**12:1**；ペテロ第一**1:3**；コリント第二**5:17**

ペンテコステの日は、今日に至るまで、すべての真のクリスチャンにとって極めて重要な意味を持っています。それは、「キリスト・イエスにある神の尊い召し」の始まりを告げるものでした（ピリピ**3:14**）。また、ペンテコステは、教会という集団が、神の「王なる祭司」となるべく、油注ぎ、すなわち奉獻を受けたことを示すものでもありました。（ペテロの手紙第一 **2:9**）。それは、その祭司職の将来の構成員となる一人ひとりが、上階の部屋で人々が受けていたもの——すなわち、神による彼らの献身の受け入れ、義認、犠牲の始まり、そして聖霊による新生——を受ける機会が今や

開かれたことを示していました。ペンテコステ以来、王なる祭司職の将来の構成員は皆、当時起こった出来事によって、その同じ関係に入っています。

ペンテコステにおいて、教会を起点として、人間を神との調和と恵みの関係へと回復させるプロセスが始まったと言ってもよいでしょう。実際、ペンテコステの日は、イエスによって提供された身代金の恵みを、神が人類に帰属させてくださったことの、人類に対する最初の外的な証拠でした。  
ローマ人への手紙 4:16-25

## 聖霊

聖霊の注ぎを理解することは、ペンテコステの完全な意義を把握する上で鍵となります。聖霊とは何でしょうか。一般的に言えば、聖霊とは神の見えない力と影響力です。それは常に存在してきました。神は永遠から永遠までおられるので、神の力と影響力、すなわち聖霊もまた、永遠から永遠まで存在します。

しかし、献身的なクリスチャンにとって、聖霊にはさらに深い意味があります。彼らにとって、聖霊とは、「キリストにある」彼らの新しい命に命の火花を与え、養い、支配する、神の聖く正しい影響力と力であると定義できます（Ⅱコリント5:17）。「霊」という言葉はギリシャ語の「プネウマ（pneuma）」に由来し、「息」を意味します。クリスチャンにとって聖霊の定義を簡潔に言えば、それは肉体の「命の息」に例えることができます。肉体には物理的な命の息が必要です。もしその

息が肉体から奪われれば、数分以内に死んでしまいます。同様に、聖霊——すなわち神の聖なる、（神の性質にふさわしい）義なる影響力——がなければ、キリストにあるクリスチャンの新しい命は生き続け、発展し、成熟へと成長することはできません。

## ペンテコステにおける聖霊

使徒行伝第2章は、聖霊の賜物に関するペンテコステの日の出来事を記しています。2～4節には次のようにあります。「すると、天から激しい風の吹き荒れるような音がして、彼らが座っていた家全体に響き渡った。そして、炎のようなもの、あるいは火の舌のようなものが現れ、一人一人の上に留まった。そして、そこにいた人々はみな聖霊に満たされ、聖霊が彼らに語らせるままに、異言を語り始めた。」

なぜ神は、聖霊の賜物として、「天からの音」、「激しい風の吹き荒れるような音」、「炎や火の舌のようなもの」、そして異言を話すことといった、このような外的な現れを与えられたのでしょうか。これには二つの理由がありました。

第一に、それはそこにいた人々への証しでした。この記述には、「天の下のあらゆる国から、敬虔なユダヤ人がエルサレムに滞在していた」とあります。多くのユダヤ人が、祭りの日であったためエルサレムを訪れていました。聖霊の注ぎによって使徒たちが働かされ、異言を語り始めた（あるいは、異言が理解され始めた）とき、それはそこに集まっていたすべての人々への証しとなったの

です。（使徒行伝2:5,6） 多くの人々は驚き、これらの出来事が何を意味するのかと不思議に思いました。他の人々は、使徒たちが酔っているのだと非難しました。これを受けてペテロは立ち上がり、群衆に向かって語りかけました。彼は預言者ヨエルと詩篇を引用し、イエスを中心とした神の計画について美しい証しをしました。（使徒行伝2:12-40）。その証しの結果は、使徒行伝12:41に記されています。「その日、三千人ほどが彼らに加わった。」

第二に、ペンテコステにおける聖霊の賜物は、神の被造物の中でかつて見られなかったような、神の力と影響力の現れであった。この力は、使徒たちに様々な「賜物」が与えられたという点で、特別な形で彼らに宿った。使徒パウロは、コリント人への手紙第一12章28-30節において、これらの賜物の一部を次のように挙げています。「癒しの賜物、助ける賜物、統治する賜物、異言の賜物……奇跡を行う者」。これらはすべて、初期教会と使徒たちの権威を確立するために与えられた、聖霊の外的な賜物の一部でした。それらは、彼らに対する神の力と影響力の驚くべき現れであり、彼らに代わって神の権威を明らかにするものでした。

## より大きな意義

これらの現れがいかに非凡であり、賜物がいかに刺激的であったとしても、また一日で三千人の新たな信徒が加わったとしても、これらはいずれもペンテコステの最も重要な意義ではありませんでした。ペンテコステのより大きな意味は、聖霊の主要な働き、すなわち内面的な働きに関わるもの

でした。この働きは人の目には見えませんでした。実際、それは「キリストの体」を構成する一人ひとりの信徒の中に、「新しい被造物」としてのいのちを育む働きであったのです。コリント人への手紙第一 12章27節

ペンテコステの日に関連する最も重要な出来事は、聖霊による各弟子への個人的な新生でした。コリント人への第一の手紙12章で、パウロはこの問題について論じています。前の節で霊の様々な賜物について述べた後、彼はコリント人への第一の手紙12章31節で次のように述べています。「（最上の賜物を熱心に求めなさい。しかし、さらに優れた道があることを、私はあなたがたに示そう）。」この「さらに優れた道」こそが、その直後の第13章の主題であり、使徒はそこで愛という徳性にのみ焦点を当てています。愛は御霊の実の総括であり、そこにはキリストにある新しいいのちの成長が示されています（ガラテヤ5:22,23）。これこそが、さらに優れた道であり、聖霊のさらに優れた働きであり、そしてペンテコステの最大の意義であったのです。

## 聖霊の働き

パウロが「愛」と要約した聖霊の内なる働きは、新約聖書の多くの箇所で言及されています。ローマ人への手紙第8章には、聖霊に関する詳細な論述が含まれており、キリストの信徒たちに多くの啓示と導きを与えています。この章だけでも、「聖霊」あるいは「御霊」という言葉が約20回も登場します。ここで述べられている聖霊の働きは、10の分野に分類することができます。

1. ローマ人への手紙8章1、2節は、聖霊を「律法」、すなわちいのちの律法として語っています。クリスチャンは聖霊——いのちの律法——を持たなければなりません。さもなければ、新しい被造物は死んでしまいます。これらの節には次のように記されています。「それゆえ、キリスト・イエスにある者には、もはや罪の宣告はない。……キリスト・イエスにあるいのちの御霊の律法が、私を罪と死の律法から解放したからである。」この箇所は、聖霊がいのちの「律法」と述べているだけでなく、イエスの足跡をたどる者たちを、彼らが以前従っていたもう一つの律法——すなわち「罪と死の律法」——から解放したことも示しています。

2. 聖霊は、人が歩み、考える際の力となるものです。ローマ人への手紙8章4～6節は、これを次のように明らかにしています。「それは、肉の行いに従わず、御霊に従って歩む私たちの中で、律法の義が に成就されるためです。なぜなら、肉の行いに従う者は肉の事柄を思い巡らし、御霊に従う者は御霊の事柄を思い巡らすからです。肉の思いは死であり、御霊の思いはいのちと平安です。」

3. 聖霊による新生は、「あなたがたのうちにキリストがおられること、すなわち、栄光の希望」（コロサイ人への手紙1:27）という考えを体現しています。ローマ人への手紙8章9節、10節はこれに言及し、次のように述べています。「もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉にあってはいないが、御霊にあっています。もしだれでもキリストの御霊を持っていな

いなら、その人はキリストのものではありません。また、もしキリストがあなたがたのうちにおられるなら、体は罪のために死んでいるが、御霊は義のためにいのちである。」この神の聖霊、あるいはパウロがさらに言及している「キリストの御霊」は、その信徒たちの「うち」にいななければならない。キリストが文字通り私たちのうちにおられるわけではない。私たちの心の中にあり、私たちを動かすのは、キリストの生み出す御霊、すなわちキリストの影響力である。ヨハネの手紙第一 2:27

4. 聖霊の第四の働きは、ローマ人への手紙8章11節に次のように記されている。「もし、イエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリストを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死すべき体をも生かしてくださる。」聖霊は「生かす」——すなわち、命を与えるのです。それは、神に仕え、神の真理を理解し、受け入れられるいけにえとなる機会を人々に与え、最終的には、死に至るまで忠実な者たちに「いのちの冠」を与えるのです。黙示録2:10

5. 私たちの心に対する聖霊の働きは、墮落した肉の行いを「死に委ねる」、すなわち死に至らせることを助けてくれます。ローマ人への手紙8章13節には、「もしあなたがたが肉に従って生きるなら、死ぬことになる。しかし、もしあなたがたが御霊によって肉の行いを死に委ねるなら、生きるようになる」とあります。

6. 聖霊のもう一つの働きは、ローマ人への手紙8章14節に記されています。「神の御霊に導かれる者は、みな神の子です。」聖霊はクリスチャンを導き、指し示します。これは、神が御自分の従う者たちに対して示される摂理的な御手配と考えることができます。聖霊は、狭い道の各段階において従う者たちと共に歩むことによって、この御手配を実現されるのです。ある賛美歌の作詞家は、「光の中を独り歩くよりは、神と共に暗闇を歩むことを選ぶ」と記しています。神の民がこう言えるのは、彼らの人生を導き、指し示すのが聖霊——すなわち神の摂理的な働きと力——であるからです。

7. 聖霊による新生は、子としての身分を確かなものとする保証です。ローマ人への手紙8章15節には、「あなたがたは、再び恐怖に陥る奴隷の霊を受けたのではなく、養子としての霊を受けたのです。それによって、私たちは『アバ、父よ』と叫ぶのです。」と記されています。聖霊は、キリストの従者たちに、彼らが神の子であることをどれほど確かな保証として与えてくださるでしょうか！

8. ローマ人への手紙8章16節には、「御霊ご自身が、私たちの霊とともに、私たちが神の子であることを証ししてくださる」とあります。これは、献身によって主に奉献された私たちの霊、心、動機が、いわば神と同じ「波長」にある、すなわち聖霊と共に「証し」をしているという主張です。これらが共に証しをする時、それは、神が聖霊を通して私たちに意図しておられるのと同じ目的を、私たちも持っているという宣言なのです。

9. 聖霊は、私たちが肉体に宿っている間、現世の試練や「うめき」を分かち合うことを妨げることはありません。確かに、神の力はあらゆることを成し遂げることができ、神は聖霊を用いて、私たちが試練や肉のうめきを経験することを防ぐこともできたかもしれませんが。しかし、それは私たちの最善の利益には（適さない）のです。聖霊のこの側面は、ローマ人への手紙8章23節に示されています。「私たち自身、御霊の初穂を受けた者として、御子の身分に受け入れられること、すなわち、私たちの体の贖いを待ち望みながら、心の中でうめき声をあげているのです。」

10. ローマ人への手紙8章26、27節にはこうあります。「御霊もまた、私たちの弱さを助けてくださいます。私たちは、どのように祈るべきかを知りません。しかし、御霊ご自身が、言葉に表せないうめきをもって、私たちのために執り成してくださいます。そして、心を探られる方は、御霊の思い（ギリシャ語：志向）がどのようなものであるかを知っておられます。なぜなら、御霊は神の御心に従って、聖徒たちのために執り成してくださるからです。」聖霊は、私たちの霊と共に証しをなさることで、私たちが望むように父なる神に祈ることが難しい時や、何を祈るべきか分からない時に、私たちを助けてくださいます。この聖句が述べているように、聖霊は「神の御心に従って」執り成してくださるのです。

## 御霊に満たされる

使徒パウロは、御霊を「消してはならない」——すなわち、新しい被造物としての命を与える力を

故意に拒んではならない——と私たちに警告しています（テサロニケ人への手紙第一 5:19）。この点に関しては、たとえわずかな自己中心的な態度であっても警戒しなければなりません。パウロはエペソ人への手紙4章30節で、「神の聖霊を悲しませてはなりません」と述べています。むしろ、私たちは神の影響力と力を可能な限り最大限に受け取るよう努め、「御霊に満たされる」べきです（エペソ5:18）。こうして、「死に至るまで」忠実であることによって、私たちはペンテコステの意義と、イエスの犠牲、苦難、そして天の父への奉仕という足跡に従うために人生を捧げたクリスチャンたちにもたらされる祝福を、真に理解することができるのです。

6月7日のレッスン

## デボラとバラク

**主要聖句：**「そのころ、ラピドトの妻である預言者デボラがイスラエルを裁いていた。彼女はエフライムの山地、ラマとベテルの間にあるデボラのヤシの木の下に住んでおり、イスラエルの民は裁きを求めて彼女のところへ上って来た。」

**士師記 4:4,5**

**選読箇所：**

**士師記 4:1-24; 5:1-3**

80年にわたる平和と祝福の時代を過ごした後、イスラエルは不忠実であったため、ヤビン王とその将軍シセラの手によるカナン人からの迫害に遭った。しかし、神の摂理により、敬虔な女性が指導者の地位に立てられた。彼女は預言者であり、イスラエルの士師であったデボラであった。

「ヤシの木の下」に座っていたデボラ（主要聖句に記されている通り）は、人々の相談相手として求められた。彼女は並外れた知恵と誠実さ、そして勇気を持つ女性であった。イスラエルの悲慘な状況を把握したデボラは、戦士バラクを訪ねた。彼女は彼に言った。「イスラエルの神、主は、『行ってタボル山に集まり、ナフタリの子らとゼブルンの子らの中から一万人の兵を連れて行きなさい』と命じられたではないか。そうすれば、わた

しは……ヤビンの軍隊の長シセラを、その戦車と大軍と共に、あなたのところへ引き寄せて、あなたの手に渡そう。」士師記4章6、7節

バラクはこの言葉を以前にも聞いていたが、何もしなかった。今、デボラの励ましを受けて、行動を起こす時が来た。主の言葉は彼の信仰を奮い立たせ、指導力を強めるのに十分であったはずだが、バラクは依然として躊躇していた。彼はデボラに言った。「もしあなたが私と共に行くなら、私も行きます。しかし、もしあなたが私と共に行かないなら、私も行きません。」（士師記4:8）。バラクの躊躇は、彼の信仰の弱さを示していた。デボラはバラクと共にいくと宣言したが、その結果もたらされる勝利と栄誉は、完全に彼のものではないと告げた。彼女は言った。「確かにあなたと共に参ります。しかし、あなたがたが成し遂げるこの戦いは、あなたの栄誉のためにはなりません。主はシセラを女の手に渡されるからです。」士師記4:9

シセラとその軍勢、そして九百台の戦車に対する戦いは、完全な大敗北となった。神は約束どおり、彼らをバラクの手に渡された。シセラは戦車を捨て、徒歩で逃げようとした。主は、イスラエルの別の勇敢な女性が彼を待ち受けるよう仕組まれた。ヘベルの妻ヤエルは、逃亡者となったシセラを自分の天幕に避難するよう招き入れた。彼女は彼に乳を飲ませ、その後、彼を覆って寝かせた。士師記 4:13-19 戦いで疲れ果てたシセラは、深い眠りに落ちた。ヤエルは片手に天幕の杭、もう片手に槌をしっかりと握りしめた。彼女は、イスラエ

ルの敵であり圧制者であるシセラが眠る天幕に入り、その杭を彼のこめかみに突き刺して地面に打ち込んだ。（士師記4:21,22）。こうしてイスラエルの勝利は完全なものとなり、デボラが預言した通り、シセラは「女の手」によって倒されたのである。

デボラとバラクは、それぞれ異なる視点から私たちに大切な教訓を教えてください。神が私たちに命じられるとき、私たちは速やかに従うべきです。デボラは 神の御心を行うことに忠実であり、確固たる決意を持っていました。彼女は大きな祝福を受け、神の御言葉における信仰の模範とされました。バラクの経験は、たとえ私たちの信仰が弱くても、神が勝利を与えてくださることを教えてください。「私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださる神に感謝します。」コリント人への手紙第一 15:57

6月14日のレッスン

## ハンナの祈りが聞き入れられる

鍵となる聖句：「やがて、ハンナが身ごもって、その時期が来ると、彼女は男の子を産み、その名をサムエルと名付けた。そして言った。『私は主から彼を願ったからです。』」  
サムエル記上 1:20

関連聖句：  
サムエル記上 1:1-28; 2:1-11

イスラエルに王が立つ以前、エルカナという男がいた。彼にはペニナとハンナという二人の妻がいた。ペニナには子供があったが、ハンナにはいなかった。毎年、エルカナは家族を連れてシロへ行き、主に礼拝し、いけにえをささげ、そのいけにえの一部を家族一人ひとりに与えた。エルカナはハンナを深く愛していたので、彼女には二倍の分を与えた。

しかし、ペニナはハンナに子供がいなかったことを嘲り、この残酷な仕打ちは年々続き、ハンナは泣き、食事も口にしなくなった。ついにある年、ハンナは神にひそかに祈り、こう誓った。「全能の主よ。もしあなたが、このしもべの苦しみを見て、私を覚えてくださり、このしもべを忘れずに息子を授けてくださるなら、私はその子を、その

生涯のすべての日、主にささげます。また、その頭には決して剃刀を当てさせません。」（サムエル記上 1:1-11）

神はハンナの祈りを聞き入れられた。翌年、彼女は男の子を授かり、サムエルと名付けた。（サムエル記上 1:19,20）。神に立てた、息子の頭に剃刀を当てないという誓いは、ナジル人の誓いであった。これは「特別な誓い、主への聖別を誓うもの」であった。この誓いの一環として、髪を切らないことに加え、ぶどう酒を飲んではならず、ぶどうの木から採れたものも食べてはならないと定められていた。この誓いを立てた者は、近親者を含め、いかなる死体にも触れてはならないとされた。（民数記6:1-21）。人がナザレ人の誓いの下に身を置く間、その人は「主の聖なる者」であった。（民数記6:8）

ハンナという名は、「恵み」または「恩寵」を意味します。主の信徒たちにはこう告げられています。「あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たものではなく、神の賜物です。行いによるものではありません。だれも誇ることをないようにするためです。」（エペソ人への手紙 2:8,9）。ハンナは祈りの人生を送りました。彼女は悩みがある時にも祈りました。また、感謝の気持ちがある時、例えば、自分の子サムエルを大祭司エリに捧げた時にも祈りました。サムエル記上 2:1-11

パウロの勧告はこうです。「何事も心配しないで、あらゆる事について、祈りと願いと感謝をもって、あなたがたの願い事を神に申し上げなさい。

そうすれば、人の知力をはるかに超えた神の平安が、キリスト・イエスにあって、あなたがたの心と意思を守ってくださいます。」（ピリピ人への手紙 4:6,7）。私たちは、希望と信頼を完全に神に置き、喜びの心を持って、神の約束に即して願い求め、絶えず祈るべきです。そうすれば、神の平安を得て、神の摂理がどのようなものであれ、「あらゆる な状況において」感謝することができるようになるでしょう。テサロニケ人への第一の手紙 5:16-18

ハンナは神に大きな犠牲を捧げました。彼女は息子サムエルを、生涯を通じて主に完全に献身するというナジル人の誓いを守る者として神に捧げたのです。今日、神に奉獻されたキリストの弟子たちもまた、この悪しき世の「死んだもの」から離れることを含め、神への完全な献身を誓う生涯の誓いを立てています。彼らはその代わりに「キリストを身に着け」、聖霊の実と恵みを育んでいます。ガラテヤ人への手紙 3:27；エペソ人への手紙 4:24；コロサイ人への手紙 3:10-17

6月21日のレッスン

## ヨナタンとダビデ——忠実な友

鍵となる聖句：「ヨナタンはダビデに言った。『安心して行きなさい。私たち二人は主の御名によって誓い合ったのです。「主が、私とあなたとの間、また私の子孫とあなたの子孫との間に、永遠にいてくださいますように」と。ダビデは立ち上がって去り、ヨナタンは町へ戻った。』

サムエル記上 20:42

関連聖句：

サムエル記上 18:1-9; 19:1-7; 20:1-42

数世紀にわたり士師たちの統治を受けてきたイスラエルは、周囲の他の国々と同じようになるために、王を望んだ。神はモーセに、この日が来ることを告げ、そのような王に求められる条件を定めておられた。（申命記17:14-20）。サムエルは、サウルによる王国の樹立において重要な人物であった。後に、神への不従順を理由にサウルから王位が奪われ、神の心になう者が後を継ぐことになると告げたのもサムエルであった。（サムエル記上13:13,14）。また、神が「立ち上がって、彼に油を注げ。この人こそがそれである」と命じられた時、ダビデに油を注いだのもサムエルであった。

（サムエル記上16:12,13）

この油注ぎの結果、主の霊がダビデに力強く臨んだ一方で、サウルからは離れていった。王の憂鬱な様子に気づいた家来たちは、ダビデを呼び寄せ、豎琴を弾かせた（ ）。こうして、病める指導者に音楽による安らぎをもたらした。サウルはダビデの働きを重んじるようになり、彼を自分の盾持ちとした。（サムエル記上 16:14-23）

これらの出来事の重要な結果の一つは、ダビデが父であるサウルとイスラエルの民に対して行っていた偉大な奉仕に対する、サウルの息子ヨナタンの反応であった。「ヨナタンはダビデの魂と深く結びつき、彼を自分の魂のように愛した。……そこで、ヨナタンはダビデを自分の魂のように愛していたので、二人は契約を結んだ。」（サムエル記上18:1,3）。こうして、私たちのキー・ヴァースの言葉にも示されているように、神への奉仕に対する相互の愛に基づいた友情が築かれたことがわかります。

この友情はまもなく試練にさらされることになる。ダビデがペリシテ軍を打ち破った後、民はこう叫んだ。「サウルは千人を殺し、ダビデは万人を殺した。」（サムエル記上 18:7）サウルは激怒し、ダビデに対して陰謀を企てようと考えた。しかし、ダビデがイスラエルの敵に対して次々と戦いに勝利するにつれ、サウルは彼を排除するためのより直接的な手段に踏み切った。彼は息子のヨナタンと家来たちに、ダビデを殺すよう命じた。サムエル記上 19:1

ヨナタンは父を愛しており、四人の息子の長男として、イスラエルの次期王となる立場にあった。

しかし、彼の最大の忠誠はイスラエルの神に向けられていた。サムエル記上**19章4節**に記されているように、ヨナタンはサウルに、国に計り知れない功績を立て、一貫して揺るぎない忠誠を尽くしてきた男の命を奪おうとするのは大罪であると告げた。ヨナタンの言葉は、衝動的な父の心に良い影響を与えた。サウルは誓いを立てて、敵意ある企てを断念した。（サムエル記上**19章6、7節**）。こうして、ヨナタンの取り成しによって、一時的な和解がもたらされ（ ）、ダビデは王とイスラエルの民に仕えるために戻った。

以上の出来事から、兄弟たちへの愛の土台を築くことについて、かけがえのない教訓を見出すことができる。「人がその友のために自分の命を捨てることほど、大きな愛はない。」ヨハネ**15:13**

6月28日のレッスン

## 勇敢な預言者アモス

鍵となる聖句：「主は、私が羊の群れを飼っているところへ来て、私に言われた。『行け、わたしの民イスラエルに預言せよ。』」  
アモス書 7:15

選読箇所：

アモス書 1:1; 2:6-16; 3:1-15; 7:10-17; 9:11-15

アモスはテコアの出身で、そこはベツレヘムの南約6マイルの場所にありました。しかし、彼は明らかに北へ旅して十部族王国の領土に入り、そこで宣教活動の大部分を行いました。アモスは、イスラエルの罪のために降りかかるであろう悲惨な災いを予告し、その忠実さゆえに迫害を受けました。アモス書 2:6-16; 7:10-17

主はアモスを通してイスラエルにこう言われた。「地のすべての氏族のうち、わたしが知っているのはあなたたちだけである。それゆえ、わたしはあなたがたのすべての不義のために、あなたがたを罰する。」そこで、「二人が共に歩むには、互いに合意しなければならないのではないか」（アモス3:2,3）という問いが投げかけられる。ここでの要点は、主がイスラエルを独占的にご自身の民とされた以上、彼らに揺るぎない忠誠を期待しておられたということである。もし彼らがそのよう

に主を礼拝し、仕えようとしなければ、厳しい懲らしめを受けることになる。

アモス書の第九章、すなわち最終章の11～15節において、神は預言者を通して、イスラエルの回復と、「倒れたダビデの幕屋」の再建を予告される。使徒行伝15章13～18節で、使徒ヤコブはこの預言を引用し、さらに「神は、世の初めから、ご自身のすべてのわざを知っておられる」と付け加えています。神はご自身の計画のあらゆる側面に対して、定められた時を持っておられます。すべての被造物は神の管轄下にあり、イスラエルとすべての国々に対する神の御旨はすべて成就されるのです。イザヤ書55章11節

今日、主の民はアモスのように沈黙を強いられることなく、愛をもって真理を語り、とりわけ義と平和の御国の希望を語らなければならない。アモスの預言の結末、そしてヤコブによるその言及は、キリストの統治下における神の御国の確立によって完全に成就する。その時、「残された人々」は主を呼び求め、祝福を受ける機会を与えられるのである。使徒行伝15:16,17

間もなく到来するこの約束の時について、私たちは次のような言葉を目にします。「もはや、隣人に教えたり、『主を知れ』と互いに言い合ったりすることはない。なぜなら、彼らの中で最も小さい者から最も大きい者まで、皆がわたしを知るようになるからだ。わたしは彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を覚えはしない。」（ヘブル人への手紙 8:11,12）。これらの約束は、まずイスラエルに与えられ、その後、すべての国々に広がってい

くでしょう。全人類は、キリストと、その栄光に包まれた教会、すなわち共に「王なる祭司」である者たちの助けを受けることになるのです。（ペテロの手紙一 2:9）。この時、また「地は主の知識で満たされる」のです。私たちはまた、神の知識が極めて明瞭に示されるという確信を持っています。それは「旅人、たとえ愚か者であっても、その道で迷うことはない」ほどにです。イザヤ書 11:9; 35:8

私たちの前に広がっているのはなんと栄光に満ちた展望でしょうか。私たちはこれに常に感謝すべきであり、それは天の父が愛する御子を遣わしてくださったことによって可能となったのです。（ヨハネ3:16；ローマ6:23）。罪も、殺し合いも、憎しみも、「戦争や戦争の噂」もなくなった世界がどのようなものになるか、少し考えてみてください。（マタイ24:6-7）。アモスは、イスラエルの不忠実について語るのに勇気が必要でした。それにもかかわらず、彼は、イスラエルと全人類の未来への希望ゆえに、喜びも持っていたと確信できます。

## 確証された約束

「アブラムは顔を地に伏せた。神は彼に語りかけて言われた。『わたしにあっては、見よ、わたしはあなたと契約を結ぶ。あなたは多くの国民の父となる。もはやあなたの名はアブラムと呼ばれず、あなたの名はアブラハムとなる。わたしはあなたを多くの国民の父としたからである。』」  
創世記 17:3-5

創世記の記述は、聖書を真摯に学ぶ者にとって極めて重要です。そのページには、人類の救い、そしてやがては地上のすべての氏族への祝福という、神の計画の基礎が記されています。したがって、私たちはその記述を注意深く検討し、聖書全体に見られる記録との調和を確認することが大切です。今回の考察では、創世記第16章、第17章、第18章に焦点を当てます。

これら三章において、後にアブラハムと呼ばれるアブラムに対する神の御業を学ぶ際、「子孫」に関する神の約束を心に留めておくことが重要です。アブラムには子孫が与えられ、その子孫は神の計画において重要な位置を占めることになっていました。この約束が最初にこの族長に与えられた時、彼の妻であるサライ（後にサラと呼ばれる）には子供がいませんでした。それにもかかわらず、二人は共に神の約束を信じ、子供が生まれるのを辛抱強く待ち続けました。しかし、子供は生まれませんでした。創世記16章1節

それは長い待ち時間でした。そもそも、約束がなされてから、彼らがカナン地に入る直前にアブラムの父テラが亡くなるまでの間に、かなりの時間が経過していました。それからさらに**10年**が過ぎましたが、依然として子供は授かりませんでした。サライは不妊である上に、すでに年を重ねており、約束の子の母となるという彼女の信仰は薄れ始めていた。どうやら、彼女は子孫に関する神の計画については依然として信じていたものの、自分がその母となることが神の御心なのかどうか、疑問を抱き始めていたようだ。

こうしたことを考え、可能であれば主に協力したいと願った彼女は、アブラムに、自分の女中であるハガルが彼の子の母となることを提案した。今日のキリスト教の基準からすれば、これは非倫理的な行為と見なされるかもしれないが、当時においては不適切とは考えられていなかったようだ。いずれにせよ、主はこの件についてサラもアブラムも叱責されなかったが、主はこの関係から生まれた子を約束の子とは認めなかった。創世記**16章2、3節**

しかし、世俗的な観点から見れば、サライの提案はこの問題に対する満足のいく解決策とはなりません。サライにとって全く予期せぬことでしたが、ハガルが子を宿すことを知るとすぐに、彼女は主人の妻を軽蔑し始めました。当時、子を産む能力は非常に高く評価されており、ハガルは明らかに自分がサライよりもはるかに優れていると感じ始め、それに応じて振る舞ったのです。創世記**16章4節**

サライはこの状況をアブラムに報告し、「私の不運はあなたに降りかかる」と叫び、この事態の責任をアブラムになすりつけようとした。（創世記16:5）。サライは当初、もしハガルが子を産んだとしても、自分が何らかの形でその子の養母となり、ハガルは母親としての権利を主張せずに身を引くものだと期待していた可能性が十分にある。しかし今や、サライはハガルの態度から、そのような取り決めには望みがないと悟り、アブラムのために子孫を得るためにこの方法を提案したのは賢明ではなかったと気づくに至った。

アブラムもまた、事態が期待通りに進んでいないことを悟り、サライへの忠誠から、彼女がハガルをどう扱うかについては、すべて彼女の裁量に委ねた。創世記16章6節によると、サライはハガルに厳しい仕打ちをしたが、おそらくそれは彼女の務めや仕事を増やすという形だったのだろう。一部の歴史学者は、当時の法律の下では、ハガルを売って手放すことは違法であったと主張している。したがって、おそらくそれが彼女の負担を増やした理由であり、彼女が家を出て逃げ出すことを期待していたのだろう。そして、まさにその通りになったのである。

## 神の介入

この時、主はこの件に介入された。主の御使い、すなわち使者は、「シュルへの道にある泉のそば」でハガルを見つけた。シュルとは、エジプトとカナンを隔てる巨大な要塞壁の名であった。明らかに、ハガルはエジプトにいる自分の民のもとへ戻ろうとしていたが、主が介入され、御使いを通

して彼女に、戻って女主人のもとに服従するよう命じられた。創世記 16:7-9

すると、その天使は驚くべき預言を語った。「主の御使いは彼女に言った。『わたしはあなたの子孫を大いに増やし、その数は数えきれないほどにする。……見よ、あなたは身ごもっており、男の子を産む。その名をイシュマエルと名づけなさい。主があなたの苦しみをお聞きになったからである。』」（創世記16:10,11）歴史家たちは、中東のアラビア諸国の人口の大部分がイシュマエルの子孫であるという点で、ほぼ一致しているようだ。

ハガルは、主の御使いの訪問に深く感銘を受けた。天使が彼女を見つけた井戸はベエル・ラハイ・ロイと呼ばれており、ヘブライ語で「私を見守ってくださる生ける方の井戸」という意味である。ハガルは、主が自分を見守っておられたこと、また、アブラムとサライからは逃げ出したものの、アブラムの神からは逃れることができなかったことを悟ったようだった。彼女は女主人のもとに戻り、やがてイシュマエルが生まれた。創世記16:13-16

この出来事には、サライにとっても、そして主に仕えようと努めるすべての人にとっても、一つの教訓があった。それは、試練から逃げ出そうとしたり、無理やり追い払おうとしたりしても、何一つ成し遂げられないという教訓である。サライの信仰の欠如が彼女の人生に厳しい試練をもたらした。彼女はハガルを追い出してその試練を排除しようと考えた。しかし、主はその経験を彼女のもと

に再び戻された。おそらくこの経験は、ハガルの態度も和らげたのだろう。いずれにせよ、聖書の記録によれば、この後、二人の女性は15年から17年間共に暮らした。

## 神の契約の再確認

それから13年が過ぎ、創世記17章1節にはこう記されています。「アブラムが九十九歳になったとき、主はアブラムに現れて言われた。『わたしは全能の神である。わたしの前に歩み、完全であれ。』」アブラムが「完全」であるべきだという神の言葉は、より正確には「完全、あるいは正直」と読むべきである。アブラムは墮落し、死に向かっている人類の一員であり、行いの完全さは彼の能力をはるかに超えたものであった。それにもかかわらず、彼は主の前で正直であることはできた。これは神の民すべてにとって可能なことであり、これに満たないものは主にとって受け入れられない。

創世記17章2～8節において、神は以前結ばれた契約をアブラムに再確認させ、その特徴のいくつかをさらに詳しく説明された。神の計画の展開に関連して名前に込められた意味の重要性に即して、主は「高き父」を意味するアブラムの名を、「多くの民の父」を意味するアブラハムへと変えられた。契約の当初の宣言は、約束された子孫を通してすべての国々に祝福がもたらされることを保証していましたが、これらの節において、主はその考えをさらに深め、アブラハムが「多くの国々の父」となり、それによって祝福されることを約束されました。「父」という言葉は「命を与える者

」を意味し、これは、国々がアブラハムの子孫を通して受ける祝福が、すなわち「命」の祝福であることを神が説明された方法でした。

使徒パウロはこの約束を引用し、神がアブラハムに与えた約束に対して「アブラハムの信仰」を行使する者はすべて、それによって彼の「子孫」となる資格を得ると示しています（ローマ人への手紙**4:16-18**）。この子孫の中には地上の者もいれば天上の者もいますが、パウロが強調する重要な真理は、アブラハムの子孫となるために、必ずしもアブラハムの肉親の子孫である必要はないということです。

「あなたから王たちが生まれる」と、神はアブラハムに約束されました。（創世記**17:6**）。数世紀後、イスラエルの王たちはアブラハムの血統から生まれました。しかし、この約束の主要な成就是、アブラハムの霊的な子孫、すなわち頭であるイエスと、その体である教会に関連しています。（ガラテヤ人への手紙**3:16,27-29**；コロサイ人への手紙**1:18**）。イエスは王の王となり、その教会は彼と共に千年の間、王として統治するでしょう。黙示録**5:10; 20:6**

創世記**17:8**は、この時アブラハムがカナンに住んでいたにもかかわらず、彼はその地において「寄留者」、すなわち旅人であったと述べている。アブラハムは、神が彼に約束された地を所有することなく死んだ。イサクもヤコブもまた、その地を所有することはなかった。（ヘブル人への手紙 **11:8-10,13**）。それにもかかわらず、アブラハムの地上の子孫は、復活によって命に甦った時、その地を

所有することになる。神の約束のいくつかがどのように成就されるかを解き明かそうとする際、混乱や誤りに陥らないよう、神の御言葉を学ぶ際には、神の永遠の視点に留意することが最も重要である。

## 割礼——神の契約のしるし

創世記17章10-14節において、割礼に関する神の指示は、神とアブラハムとの間の「契約のしるし」として与えられた。パウロは、割礼を、アブラハムがすでに神とその約束に対して示した信仰の「しるし」であり、また、同じ信仰の歩みを踏むすべての人々のためのものとして語っている。ローマ人への手紙4章11、12節

新約聖書において、割礼は心の純粋さと目的の清さを象徴するものとして用いられています。これは、主がアブラハムに対して「正しい者」となるよう命じられた言葉に含まれる考えとほぼ同じものです。アブラハムの霊的な子孫は、文字通りの割礼の儀式を行うよう求められてはいませんが、心を清め、肉のあらゆる不純さを捨て去るよう戒められています。パウロは次のように記しています。「割礼とは、文字によるものではなく、霊による、心におけるものであり、人の称賛ではなく、神の称賛によるものです。」「あなたがたは、キリストの割礼によって、肉の罪の体を脱ぎ捨て、人の手によらない割礼を受けたのです。」ローマ人への手紙 2:29；コロサイ人への手紙 2:11

包括的なアブラハムの契約のしるしが割礼であることは、ふさわしいことです。割礼が何を意味す

るかという新約聖書の説明を考慮すると、主の御前で心と動機が清くあり、主の約束と律法の義に対する揺るぎない信仰に基づいて初めて、アブラハムの契約の下で約束された祝福を受けることができるということです。

## サライの名が変えられる

創世記17章に戻ると、15節と16節で主はアブラハムに、サライの名前をサラに変えることを明らかにされた。これは、彼女が王たちの母となることから、「高貴な女性」を意味する。使徒パウロは、サラが主によって王たちの母と見なされる理由について、彼女がアブラハムの霊的な子孫が育まれる契約を象徴しているからであると説明している。したがって、サラは、アブラハムが象徴的な父であるのと同じ王たちの母である。これらは、パウロが「約束の子ら」と呼ぶ王たちであり、地上のすべての氏族の祝福のために千年間統治することになる。ガラテヤ人への手紙4章22-31節

## 約束されたイサク

アブラハムは神の約束に対して大きな信仰を持っていましたが、それは完全な信仰ではありませんでした。時折、その信仰は揺らぎましたが、その一例が創世記17章17節、18節に記されています。サラが不妊であったにもかかわらず、神が最初に約束をされた時、アブラハムは、当時サラがまだ若かったため、彼女が息子を産むと信じる信仰を持っていました（ ）。しかし今や、不妊であることに加え、彼女は九十歳になっていました。主が

今回、サラが息子を産むと告げられた時、アブラハムは「顔を地に伏せて笑った」のです。

この箇所が示すように、アブラハムは心の中で、そのようなことが実現するとは疑っていた。そして地面から立ち上がり、主の前に嘆願した。「どうかイシュマエルがあなたの御前で生き続けますように！」。この嘆願の意図は、イシュマエルが約束の子となることにあるようだ。神はアブラハムに、イシュマエルは生き残り、大いなる国民の父となることを確約された。しかし、約束の子に関しては、サラが子を産み、その名はイサクとされ、彼が約束の契約の相続人となることが定められていた。創世記17:18-21

21節によると、イサクは「来年のこの定められた時期に」生まれることになっていた。これはアブラハムにとって極めて重要な時期の預言であった。彼は神が子孫を与えるという約束を果たされるのを長い年月待ち続けてきたが、その時まで、その待ち時間がいつまで続くのかについて、何の示唆も与えられていなかった。神は、この同じ「待ち」という試練を通して、御自分の民のほとんど全員の信仰を試されてきました。復活後のイエスに、弟子たちは「今こそ、イスラエルに王国を回復してくださるのですか」と尋ねました。イエスは答えられました。「父がご自身の権威に委ねておられる時や時期は、あなたがたが知るべきことではありません。」使徒行伝1章6、7節

期待される出来事が起こる時が近づくと、主はしばしばその秘密をしもべたちに明らかにされます。ノアは箱舟の建造に長い年月を費やしましたが

、おそらく洪水 がいつ来るのかという明確な見当もつかなかったでしょう。しかしついに主は、「七日後に、わたしは雨を地上に降らせる」と言われました。（創世記7:4）。今、アブラハムに対しても、主は「来年のこの定められた時」と告げられた。サラが息子を産む可能性は低いとアブラハムが心の中で考えていたことを踏まえると、主は彼の信仰を強める手段として、この明確な情報を与えられたのかもしれない。

創世記第17章の最後の節には、アブラハムが「契約のしるし」である割礼に関する主の指示に即座に従ったことが記されている。「その日」、彼は自分自身と息子のイシュマエルを含め、家中のすべての男子に割礼を施した。（創世記17:23-27）。聖書には、主が即座の従順を喜ばれるという多くの証拠があります。アブラハムの場合、この即座の行動は、サラに関する神の約束への信仰が回復されたこと、そして契約における自分の役割に関わるあらゆる細部を遂行したいと願っていたことを示唆しています。

## 神がアブラハムに現れる

マムレはアモリ人であり、以前、アブラハムが甥のロトを救出した際に彼に加わった人物であった。（創世記14:13）。創世記18章1節における「マムレの平野」という表現は、明らかにマムレが所有していた平野を意味している。なぜなら、アブラハムはその地における単なる旅人であったからである。しかし、どうやら彼はマムレをはじめとする多くのカナン人とは友好的な関係にあったようだ。

本文には「主がアブラハムに現れた」と記されているが、後にこの現れは、主の使者として遣わされた「三人の男」の訪問であることが明らかになる。（創世記18:2）。このような表現は、聖書において主が人類と関わる際、非常に頻繁に用いられている。人間には、神を見て生き残ることはできない。（出エジプト記33:20）。しかし、神が使者たちを遣わす際、神は、彼らが訪れる人々が使者たちを尊厳をもって扱い、彼らが伝えるメッセージを真剣に受け止めることを期待しておられる。

アブラハムを訪れたこの「三人の男」は、天使、すなわち霊的存在であり、族長と自由に会話できるよう、物質的な姿をとっていたのである。新約聖書において、使徒パウロは彼らをそのように呼び、また暗にアブラハムの歓待を模範として挙げており、「旅人をもてなすことを怠ってはならない。ある人々は、知らずに天使をもてなしたことがあるからである。」（ヘブライ人への手紙13:2）

## アブラハムの歓待

予期せぬ訪問者たちに居心地よく過ごしてもらいたいというアブラハムの強い願いを理解するには、彼の立場に立って考える必要があります。彼が住んでいたのは、毎日何千人もの人々が行き交う賑やかな大通りではありませんでした。むしろ、彼は「平原」のテントの中で暮らしていたのです。テントの前を通りかかる見知らぬ人が一人もない日が、何日も続くことも十分にあり得たのです。そこに三人の男が現れ、彼らは皆、相当な重要人物であることを示唆していました。

アブラハムにとって、これは特別な出来事であり、彼はこの機会を最大限に活かしたいと願っていた。アブラハム自身、その地域では重要な人物であり、物事を成し遂げたい時には指示を出すことに慣れていた。彼はサラに、この特別な訪問者たちのために食事を用意するよう な指示を出した。また、子牛を解体して食事の準備をするよう命じた若者に対しても、同様のことが言える。 創世記 18:6,7

アブラハムは、この三人の男の訪問に少なからぬ興奮を露わにした。記録によれば、彼は「群れのもとへ走って行き」、食べても柔らかいと分かっている子牛を自ら選んだと記されている。 主が遣わした使者たちによる訪問は、アブラハムにとって珍しいことではなかった。使徒パウロは「知らずに天使をもてなした」と説明しているが、アブラハムは、この三人の男たちが自らを明かしている以上の存在であると見抜いていた可能性は十分にある。いずれにせよ、彼は親切で気前の良いもてなし人であることを示し、サラも進んで彼に協力したようだ。

## サラへのメッセージ

アブラハムは客たちが食事をしている間、立ち続けていた。つまり、彼は使用人の役割を引き受けていたのである（創世記18:8）。食事中、三人の男たちはサラの行方を尋ねた。サラは食事の準備を手伝っていたものの、この時点までは明らかに姿を見せないようにしていたようだ。すると、訪問者たちの代表がアブラハムに言った。「来年の今頃、私は必ずあなたのところに戻ってくる。その

時、あなたの妻サラには男の子が生まれるだろう。」創世記18:10

どうやら、そのテントは男たちが食事をしていた場所から遠くなかったようで、サラはこの言葉を聞いて「心の中で笑った」、つまり、私たちが言うところの「独り笑った」のである。しかし、天使は彼女が笑ったことを知っており、後でそのことを取り上げたとき、サラは否定したが、天使は言った。「いいえ、あなたは確かに笑った。」創世記18:12-15

「主にとって不可能なことなどあるだろうか？」これが、この物語が私たちに与える実践的な教訓である。これは、神の計画が実現していく過程において極めて重要な点である。おそらく、主がイサクが生まれるまでアブラハムとサラをそれほど年老くさせた理由の一つは、すべての約束の成就に責任を負うのは彼らではなく、主ご自身であることを示すためであったのだろう。

今日のキリスト教界、そして過去何世紀にもわたり、人々は誤って、地上の神の御計画の成功が人間の努力にかかっていると考えてきました。そうではないこと、そしてアブラハムの子孫を通して地上のすべての氏族を祝福するという神の計画が確実に成就することを、私たちは皆、喜ぶべきです。一見するとその逆のように見えるあらゆる状況にもかかわらず、それは確実です。それは「私たちの魂の錨となる希望であり、確かで揺るぎないもの」なのです。ヘブル人への手紙 6章19節

## 神はアブラハムを試される

主は、ご自分のしもべたちを、彼ら自身や、彼らが特に心を寄せている人々に関わる事柄について、ご自身の内なる思いに招き入れてくださいます。大まかに言えば、真理に照らされた神の民は、全人類に関心を持つべきです。彼らはアブラハムの精神を持ち、神の計画——すなわち、アブラハムの子孫を通して地のすべての家族が祝福されるという計画——に対して熱意を示すべきなのです。

主は、ソドムの都の甚だしい悪行ゆえに、それを滅ぼすことを決心されていた。しかし、主はこの機会を利用して、アブラハムがその都の民、とりわけそこに住んでいた自分の親族であるロトとその家族に対する関心を試された。「私は、この計画をアブラハムに隠すべきだろうか」と主は尋ねられた。「アブラハムは必ずや大いなる、力強い国民となり、地上のすべての国民は彼を通して祝福を受けることになるからだ。」創世記18:17,18

この箇所は、神がご自分の僕たちが神の視点を理解できるよう、彼らの知的な限界に配慮してくださるといふ興味深い例を示しています。神がアブラハムに語られた言葉を言い換えるなら、それは、ソドムとゴモラの民が非常に邪悪であるという報告を聞き、それを調査するために下って来られたことを意味しています。もし彼らが報告通り邪悪であれば、神は間違いなく彼らを滅ぼすでしょう。もちろん実際には、宇宙の創造主であり、天と地の神である神が、必要な情報を得るために自ら地上を訪れる必要などなかった。これは単に、

アブラハムの理解力に合わせて語られたに過ぎない。

## アブラハムの執り成し

アブラハムは、主がソドムとゴモラの滅亡を念頭に置いていることを明らかに察知していた。彼は、特にそこに義人が数人でもいることが判明したならば、その町を救うよう主へ熱心に懇願した。アブラハムは最初、義人が五十人見つければ町は救われるかと尋ねた。彼がその数をさらに減らし続けたのは、ロトとその家族のことを念頭に置いていたからかもしれない。創世記18:23-32

主は、アブラハムが人数を次々と減らしていく中でもその願いに応じることによって、アブラハムに対する忍耐と、憐れみを示そうとする御心を示された。結局のところ、必要な十人の義人さえ見つからなかったため、両都市は滅ぼされた。創世記19:24,25

これは、地上のすべての国々を祝福するという神の約束に照らして、重要な点を浮き彫りにしています。イエスは、ソドムとゴモラに対して悔い改めを促すための努力がなされなかったことを示しています。もしそのような努力があったなら、イエスは説明されたように、それらの町は残され、滅ぼされることはなかったでしょう。（マタイによる福音書11章23、24節）しかし最も重要なことは、イエスがまた、王国の裁きの日の期間において、彼らにも悔い改め、行いを改め、命を得る機会が与えられると説明されたことです。こうして、アブラハムに与えられた「彼の子孫を通して地

上のすべての民族が祝福される」という約束に調和して、彼らもまた、世界の他の者たちと共に記憶されるという事実の明確な例が見て取れます。この約束、そして神が人類に対してなされたすべての約束が、まもなく成就することを、私たちはどれほど待ち望んでいることか！